

終末をむかえて —出版に見るノストラダムスブーム—

平成11年7月27日～8月30日

「1999年7の月、空から恐怖の大王が降ってくる…」これは中世フランスの医師であり、占星術師でもあったノストラダムスが残した4行詩のなかでも特に有名な一節です。日本でもこの詩の影響で「1999年人類滅亡説」が話題になり、ノストラダムスの予言ブームが何度か起きているので、ご存知の方も多いのではないでしょうか。

今回は、当館の資料のなかからノストラダムスについて扱っているものを紹介します。1999年7月が過ぎ行こうとしている今、もう一度客観的な視点から日本のノストラダムスブームを振り返ってみたいと思います。

展示資料一覧

<>内は当館請求記号

●日本におけるノストラダムス像

ノストラダムスについてみなさんは、どんな印象をお持ちでしょうか。怖い、うさんくさい、とにかくすごい予言をした人等々、さまざまなノストラダムス像をお持ちのことと思います。ノストラダムスが日本でブームになって以来、社会的に大きな事件や問題が起こる度に彼の予言が登場するようになり、その都度、彼の印象も変化していきました。

ここでは日本で一般的なノストラダムスの人物像とその変遷を紹介します。

1. MORE

集英社〔編〕 集英社

<Z23-337>

15巻8号通巻170号 (1991年8月号)

ノストラダムスの最も一般的なイメージは、やはり予言者。的中したと解釈される出来事と予言を対象させて紹介するケースがほとんど。

2. 世紀末大予言

平川陽一 [著] 東京 日東書院 1992(平4) <SB391-E350>

ノストラダムスの名を一躍世に知らしめたアンリ II 世の死についての予言

3. 宝島

宝島社 [編] 宝島社 <Z24-311>

23巻9号通巻320号 (1995年5月3日号)

恐怖の大王とは何か。ノストラダムスブームには欠かせないテーマ

4. ノストラダムス世紀の大予言

平川陽一 [著] 東京 日本文芸社 1992(平4) <SB391-E340>

ヒトラーの登場を予言したとされる詩。

5. ノストラダムス大予言原典 諸世紀

ヘンリー・C・ロバーツ [編纂] 大乘和子 [訳] 内田秀雄 [監修]

東京 たま出版 1975(昭50) <SB391-80>

ノストラダムスの予言の全文訳をさらに邦訳したもの。その後、日本ではタイトルどおり原典として扱われ、多くの研究者たちの基礎資料となった。

6. ノストラダムス未知の予言集

J・H・ブレナン [著] 小川謙治 [訳] <SB391-E542>

東京 イースト・プレス 1992(平4)

第二次大戦中には、ドイツやイギリスだけでなく、アメリカでもノストラダムスの予言を扱った映画が作られ、戦意高揚のために使われている。

7. 大予言者ノストラダムスの謎

ミシェル・クロード・トゥシャール [著] 千葉茂隆 [訳] <SB391-359>

東京 大陸書房 1987(昭62)

この論文に見られるのは、まぎれもなく町医者としてのノストラダムスである。

8. 週刊現代

講談社 [編] 講談社 <Z24-19>

24巻2号通巻1126号(1992年1月3・10日号)

9. 女性セブン

小学館〔編〕 小学館

<Z24-28>

35巻36号(1997年9月25日号)

ダイアナさんの事故死にも予言が。ノストラダムスの予言は、次々と起こる事件に新たな解釈で対応することで、どんどんその範囲を拡大していった。結果彼のイメージもオカルト的な面が強調されていった。

10. ルネサンスの人々

渡辺一夫〔著〕 東京 鎌倉文庫 1949(昭24)

<235.051-W62r2>

恐らく、ノストラダムスを日本に初めて紹介した作品。内容は彼のオカルト的な面に対してはむしろ批判的であり、あくまでルネッサンス期の文化人のひとりとして紹介している。

11. ノストラダムスの生涯

竹下節子〔著〕 東京 朝日新聞社 1998(平10)

<SB391-G607>

ブーム期のオカルト面だけが突出したノストラダムスのイメージを払拭するため、原点に戻り、ルネッサンス期の文化人としてのノストラダムスの生涯を豊富な資料をもとに紹介した作品。その評価は高い。

●出版にみるノストラダムスブーム

では日本のノストラダムスブーム(正確に言えば予言とその解釈ブーム)とはどんなものだったのでしょうか。ブームの分け方にも諸説ありますが、今回は日本で初めてブームが起きた 70 年代を第一次ブーム、湾岸戦争の影響で一気に出版量が増加した 90 年代を第二次ブームとして紹介します。

『1999 年人類滅亡説の登場—第一次ブーム—』

日本で初めてノストラダムスの予言ブームが起きたのは、1973 年から翌年にかけてのことです。当時はオイルショックのさなかでもあり、資源の枯渇問題や環境汚染の深刻化など現代文明の行きづまり感を強調するニュースが飛び交い、社会的不安が広がっていました。そんな状況下で、ノストラダムスの予言をもとにした「1999 年人類滅亡説」はいかにも信憑性のある話として、主に若者たちの間に浸透していきました。

<ブームの土壌>

ノストラダムスが登場した当時、人々は多くの社会不安の中で、世紀末的なものを求めていました。ある意味ではノストラダムスブームは起こるべくして起きたと言えます。

12. 日本沈没(上・下)

小松左京 [著] 東京 光文社 1973(昭48) <Y81-9583>

73年のベストセラーSF小説。その後映画化され、こちらも大ヒットとなった。

13. 終末から

筑摩書房 [著] 筑摩書房 <Z23-236>

2号(1973年8月号)

73年創刊。公害などの現代文明の暗部を見据えた内容が受けた。当時蔓延した世紀末的な気分がうかがえる。

<ブームの誕生>

14. ノストラダムスの大予言

II・III・IV・V・中東編・希望編・地獄編 <Y84-990>

五島勉 [著] 東京 祥伝社 1979~1994年

日本のノストラダムスブームを築き、常に先頭に立ち、支えてきたのがこのシリーズ。その手法は、後続のほとんどの関連本の雛型であり、ノストラダムスとその予言を一躍世に知らしめた。

15. WEEKLY プレイボーイ

集英社 [編] 集英社 <Z31-249>

8巻50号No.49号(1973年12月18日号)

ベストセラーになった「ノストラダムスの大予言」の書評。その1999年人類滅亡説は大反響を呼んだ。

16. 週刊現代

講談社 [編] 講談社 <Z24-19>

1974年2月7日号

「ノストラダムスの大予言」の批判的書評。多くの大人たちにとっては、むしろ当たり前の反応であったかも知れない。

17. 週刊ポスト

小学館 [編] 小学館 <Z24-190>

1973年12月28日号

ノストラダムスの予言を受け入れた10代の若者層の深刻な状況をレポートした記事。

18. りぼん

集英社 [編] 集英社 <Z32-290>

36巻11号(1990年11月号)

「ちびまる子ちゃん」 さくらももこ [著]

70年代の世相を反映したおなじみの漫画。初めてノストラダムスブームに触れた子供たちの様子が素直に描かれている。

『新解釈続々。百家争鳴 —第二次ブーム—』

90年代に入ると湾岸戦争、ソビエト連邦の崩壊という国際的な大事件が相次いで起こり、その影響でノストラダムス関連本の出版も急増しました。また、予言の解釈は「恐怖の大王とは何か」「人類を滅亡に導くものはなにか」といった謎解きゲームのような様相を呈し、多くの研究者がその流れに乗り、それぞれ個性的な新解釈を展開させています。

19. DIAMOND BOX

ダイヤモンド社 [編] ダイヤモンド社

<Z23-382>

12巻8号(1991年8月号)

20. 週刊ポスト

小学館 [編] 小学館

<Z24-190>

22巻45号通巻1073号(1990年11月23日号)

湾岸戦争の勃発とそれに対応する予言の解釈は、新たな読者層を開拓し、書店にはノストラダムスのコーナーができるほどであった。

21. SPA !

扶桑社 [編] 扶桑社

<Z24-17>

40巻11号通巻2234号(1991年3月20号)

湾岸戦争の前後に急増した関連本をリスト化し、分析した記事。

22. ノストラダムスの大予言 最後の読み方

平川陽一 [著] 金森誠也 [監修]

<Y86-E564>

東京 日東書院 1991(平3)

ノストラダムスは、湾岸戦争やサダム・フセインの登場も予言したとされる。

23. ノストラダムス・メッセージ

ヴライク・イオネスク [著] 竹本忠雄 [訳]

<SB391-E179>

東京 角川書店 1991(平3)

イオネスク氏は、ただひとり70年代にソ連の崩壊を予言から導き出したことで、日本でも有名になった。この資料はその邦訳版。

24. 週刊少年マガジン

講談社 [編] 講談社

<Z32-388>

33巻42号No.37(1991年9月4日号)

「MMR」 石垣ゆうき [著]

現在も連載が続いている人気漫画。TV ドラマにもなった。90年代の子供たちは、この漫画を通してノストラダムスの名を知ったものが多いであろう。

25. SPA !

扶桑社 [編] 扶桑社

<Z24-17>

44巻17号通巻2441号(1995年5月3・10日号)

26. ノストラダムスの大予言・最終解答編

五島勉 [著] 東京 祥伝社 1998(平10)

<Y84-990>

言わずと知れた「大予言」シリーズの最終巻。五島氏の解釈では、恐怖の大王は「イエス・キリストの再臨」。

27. ノストラダムスの預言書 解説 I

池田邦吉 [著] 東京 成星出版 1996(平8)

<SB391-G356>

多くの著作を持つ池田氏の解釈では、恐怖の大王はイタリアのベスビオ火山の噴火。

28. [真説] ノストラダムスの大予言

「1999年人類滅亡」は絶対はない！！

<Y86-E505>

加治木義博 [著] 東京 KKロングセラーズ 1990(平2)

加治木氏は、「恐怖の大王は1988年のイラン・イラク戦争時、仲介役をつとめたデクエヤル国連事務総長である。」というユニークな説が受け、話題になった。

29. ノストラダムス暗号書の謎

川尻徹 [著] 東京 二見書房 1987(昭62)

<SB391-372>

川尻氏は「ノストラダムスの詩は日本語で解釈できる。」という説をうちだした。

30. ノストラダムス 1999 年から始まる惨劇

ステファン・ポーラス [著] 桂ケイ [訳]

<SB391-G557>

東京 ソニー・マガジズ 1997(平9)

欧米の研究者では主流となっている「恐怖の大王は彗星、アンゴルモアの王はモンゴルの王」という説を展開している。

31. ノストラダムス大予言の謎
アポカリプス21研究会 [著] 天山出版 大陸書房 [発売] 1991(平3) <SB391-E354>
32. コンピュータが解いたノストラダムス全警告
マンフレッド・ディムデ [著] 畔上司 [訳] 東京 二見書房 1993(平5) <SB391-E502>
多くの解釈の中で例の詩を「恐怖の大王は現れないだろう」と訳しためずらしいケース。
33. 大予言の嘘
志水一夫 [著] 東京 データハウス 1991(平3) <HR511-E343>
ノストラダムスの予言をはじめ、占い等のオカルト的なブームに対し、その矛盾点を挙げ、終始論理的な批判を展開している著作。その影響を受け同様の批判本も多数刊行されるが、予言本とその批判本が共に売れるという奇妙な現象も見られた。
34. 超時空最終預言(上)
浅利彦彦 [著] 東京 徳間書店 1992(平4) <SB391-E454>
浅利氏の解釈では、「恐怖の大王は二億人の悪魔的宇宙人の侵略。」
35. ノストラダムス 予言書新解釈
頭脳組合 [著] 東京 彩文館出版 1997(平9) <US41-G1419>
ノストラダムスの予言詩のあいまいさを利用し、完全に遊んでしまっている新しい形の批判本?

●ブームを振り返る

日本のノストラダムスブームの特徴として、それを受け入れ、支え続けてきたのが常に10代を中心とした若者層であったことが知られています。彼らは一体、ノストラダムスの予言に何を感じ、何を求めたのでしょうか。

最後に、ブーム自体とそれを支持した人々の心理について言及している資料を展示します。今回の展示を通して、予言が当たったとか外れたという議論を超え、予言ブームの背景やその存在意義について一時、思いを馳せていただけたら幸いです。

36. SPA!
扶桑社 [編] 扶桑社 <Z24-17>

